始まる

この日は、雨が降っていた。
外は暗く、雨の音が私を読書に集中させてくれていた。
物語は佳境に入っていた。
本のページの片隅に、しずくがポトッと落ちた。
私は目の端を拭った。
しかし、私の目は、カラカラに乾いていた。むしろ、ドライアイ気味であった。
「あ、涙じゃなかったのか」
私はしずくの根源を求めて、上を見上げた。
そこには、見事な雨漏り現場があった。
私はとりあえず、隣にあったマグカップをその下に置いた。しかし、水は跳ね返り、畳に飛び散った。
ここで、桶でも鍋でもあればよいのだが、あいにく家には風呂もないし、台所もなかった。
どうするか。
このまま、ただ水が落ちていくのを眺めているしかないのだろうか。
私は、玄関に使い古した靴があるのを思い出した。
ああ、あれなら。
私はその古びた靴を取って来た。片方は底がはがれかけていたので、もう片方を水の落下地点に置いた。
思ったとおり、布製の靴は、ぽとんとおちた雨を吸い込んでくれた。
雨はどんどん落ちた。
私は雨が靴に吸い込まれる様子を、じっとみていた。
物語の佳境は、声を奪われたまま、畳の上に捨て置かれていた。
そのうち、靴の中の水分は飽和点に達した。
その瞬間、「あっ」と私は思った。
靴が、一瞬宙に浮き、そばにあったもう片方の靴と共に、すたすたと歩きだしたのだ。
まるで透明人間が歩いているように。
私はあっけにとられて見ていた。
そのうち、立て付けの悪い玄関の扉をキィと開け、靴たちは家を出て行った。
その先に、何があるのだろう。
わからないが、靴たちの第二の人生が、今始まった。

【2017-09-16】指さし小説　第１８話

http://p.booklog.jp/book/117285

著者：かっこ
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/resipi77/profile

おこんばんは。皆さん、あっという間にまた一カ月が経ってしまいましたね。
私の中の砂時計は、あっという間に落ちてしまいます。
ところで、今回のテーマ「始まる」ですけれども、ちょっと私に希望を与えるテーマでした。
あっという間に過ぎ去る中にも、本当に自分のしたいこと、やり始める時なのだな。と感じました。きっと靴たちも、本当にやりたいことに向かう力を、雨から得たのだなと思います。意味のないことなんて、ないんですね～。

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/117285

電子書籍プラットフォーム：パブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社トゥ・ディファクト